
今日、明日、未来。

畑野いよかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日、明日、未来。

【Nコード】

N8813M

【作者名】

畑野いよかん

【あらすじ】

史郎と里子は高校時代のクラスメート。

高校卒業後2人は恋人に。

そして数年後夫婦になり、かわいい子供にもめぐまれた。

初めての妊娠に悲しい別れを経験し、初めての育児に悪戦苦闘する日々。

周りの助けをかり、2人は成長していく。

今日、明日、そして未来はどんなことがまちうつけているのだろうか。

ふたり

「あつ、風船。」

見上げると、真つ青な空に赤い風船がフワリと浮いている。

まるで、空を散歩するかのようにつつくりと、心地よい風に吹かれて空高く上がっていく。

「風船どこにいくのかなあ？」

「どこかにお散歩かな？」

幼い女の子が母親に聞いている。

風船が小さく見えなくなるまで見ていた里子^{さとこ}は手に持った買い物袋を持ち直し家路についた。

史郎^{しろう}と里子は2ヶ月前に結婚したばかり。

元々高校のクラスメートでクラス替えのない学校だったので3年間同じクラスだった。

史郎の斜め後ろが里子の席。

授業中、ちらつと後ろをみるとよく里子は机に突っ伏して寝ていた。

史郎はバスケット部に入っていて、レギュラーになるために毎日練習を欠かさなかった。

一方里子は、バレーボール部に所属。

史郎のいるバスケット部とは違い、試合をするには部員がたりない弱小チーム。

それなりに練習はしているが、なんせ試合ができない状態だから、遊びにちかい活動だった。

そんな二人も無事卒業。

卒業後、史郎は県外の大学へ進学。里子は県内の会社へ就職した。

卒業後しばらくしたある日、友達から里子にメールがきた。

「史郎が久しぶりにこっちに帰ってくるんだって！久しぶりに今日みんなで会わない？」

ちょうどその頃教習所に通っていた里子は

「うん。久しぶりに会いたいな。今から教習所だから終わったら連絡するね」

と返信して教習所へ。

教習終了後、教習所の外に出ると「プップー」とクラクションが。

「迎えに来たよー」と友達が手を振っている。

車に駆けよると、中には友達とその彼女。とすでに史郎の姿もあった。

「久しぶりー！元気だった？」

元々クラスメートのこの4人。

車の中での会話も弾み、その後の食事も楽しい時間を過ごした。夜も遅くなり、みんなで連絡先を交換してその日は解散した。

その後数回4人で遊だが、しばらくして二人だけで遊ぼうと史郎から誘いがあつた。

断る理由もなかったので里子は会う約束をした。

駅で待ち合わせをして史郎の運転する車で出掛ける事にした。

里子が駅に着くと史郎はシルバーのスポーツタイプのクルマで待っていた。

里子にとって男性の運転する車に乗るのは（しかも助手席）に乗るなんて父親以外は初めての事。

ましてや、男の人と二人つきりで会うのはこれが初めて！

「久しぶりだね。」

「うん。…元気にしてた？」

「うん。そっちは？」

「ウチも元気だよ……。」

「……………」

「……………」

お互いぎこちない会話で話しは進まず。

里子はふと気づいた

あれ？これってデート？

もしかしてデートだよな？

でも、付き合っていないからデートじゃないのか？？

「……………ちゃん、さっちゃん？」

「えっ？」

「さっちゃん、もしもーし？」

「あつ、えっ？ごめん！何？」

「今日はどこ行く？」

うーん：「デート」映画？という里子の単純な発想で、食事をした後映画を見に行くことになった

気軽に入れるレストランに入り、たわいもない話をしながら食事をした

お互いの映画の好みが分からなかったので、無難に選んだ動物が主役の映画を見て初めてのデートが終わった

（その後、史郎は恋愛系、里子はホラー系と全く違った系統が好きなのが判明）

律儀な史郎は9時には里子をアパートに送り届け、アパート前に止めた車中でしばらくおしゃべりをしていた。

「今日は楽しかったね。ありがとう。また誘ってね。」

里子がドアを開けようとした時、史郎が

「さっちゃん好きな人いる？いなかったら付き合ってくれる？」

！！！！

突然の告白にカァーと顔が熱くなりどぎまぎしている里子チラッと見ると、里子以上にどぎまぎしている史郎が

「ウ、ウチでよかったら…」と言っのが精一杯

かくして二人は付き合うようになった

史郎は学校があるので週末にしか帰ってこれなかったからデートは毎週末だけ

日曜日の夜には学校のある県外へ帰らなくてはならない

それでも楽しかった途中で何度かハプニングが起きたが交際は順調

に続いていた。

史郎が学校を卒業後1年経ち、付き合い始めて3年たったある冬の日。

「今日は里子が行きたいっていった公園に行こうか？」
史郎は里子をドライブに誘った。

それは小高い丘の上にある小さな公園。

その公園の中央には海が一望できる展望台があり、里子が幼い頃によく家族で来ていたお気に入り場所であった。

「うわー、久しぶりに来た。うれしいなー。海が綺麗だね、史郎」
「そうだね。天気もいいし良かったね。」

とても嬉しそうに歩く里子の後ろから声を掛ける史郎はポケットに入っている物を確認すると、意を決したように足を止めた

「里子！」

「ん？なあに？」

振り向いた里子の目の前には貴臣の緊張した顔があった。手には指輪を持っている。

「俺と結婚して下さい。」

突然のプロポーズに驚き里子は言葉が出なかった

「私でいいの？料理とかあんまり出来ないよ……私で良かったら……うん。」

緊張でこわばっていた顔が緩み笑顔になった史郎は里子を抱きしめた。

夕陽が沈む海を背に手をつないで帰って行く2人。

里子の左手の薬指には輝く指輪が光っていた。その半年後、2人は

結婚式を挙げた。

両親や親戚、友人たちが2人の門出を祝ってくれた

幸せな日が続いていた

新しい命

結婚して数カ月たった頃、里子のお腹に小さな命が宿った

もしかして…

薬局で検査薬を購入（手に取るのも買うのも初めてでちょっと照れた）し、家のトイレで検査開始。

数分後「陽性」の線がうつすら出た
うれしい！早く史郎に報告したい

だけど、喜ぶ史郎の顔を直接見たい。

手に持った携帯をしまい史郎が帰ってくるのを待った。

「ただいま」

「おかえりー！」

自然と顔がにやける

「にやけてるけど、なんかいいことあった？」

待ってましたとばかりに

「今日、検査しました。その結果「陽性」でしたー！！」

「え、なんの検査？どっか悪いの？陽性って？」

すっとぼけた質問に拍子抜け。

「生理が遅れてるから妊娠検査したの。妊娠してますよ」

の言葉にパツと笑顔になる

「おおー！おめでとうー！」

「今日土曜日だし、来週病院に行ってくるね」

早速里子のお腹をなでる史郎だった。

月曜日、里子は早速産婦人科へ。

病院の雰囲気もよく、看護師さん達も優しい。

検査に必要な書類を書き待合室にいと名前が呼ばれた。

先生はちょっと太めで眼鏡をかけた、優しいそうな白髪のおじさん。

「初めての妊娠ですか？では内診を試してみようね」

初めての内診台に緊張…

どう乗るの？どうするの？どうしたらいいの？どうしたら……

「ほら見て。ここに袋があるでしょ。これが赤ちゃんの入ってる袋だよ。まだ小さくて見えないけど妊娠してますよ。おめでとうございます。」

服を整え、診察室へ戻ると改めて先生が

「おめでとうございます。いま妊娠5週目ですよ。まだ赤ちゃんが

小さいのでまた2週間後にいらしてください。」
と言った。

その日の夜はささやかながらお祝いをした

2週間後、再び病院を訪れた。

「おつ、赤ちゃん大きくなってますね。

ここ分かります？ピクピクしているの。赤ちゃんの心臓ですよ。」

先生がエコー写真をくれた。

「はあー、これが赤ちゃんか、小さいなあ」

里子はお腹をさすりながら思った。

「心拍の確認ができたので次回は母子手帳を持ってきて下さい。」
母子手帳？！

憧れの母子手帳をもつ手にすることができるの？

気の早い里子は、病院帰りに市役所へ行き母子手帳をもらいに行つた。

「ご妊娠おめでとございます。これから頑張ってくださいね、お母さん！」

お母さん…

初めてそう呼ばれた里子は、くすぐったい気持ちになり小さな声で
「はい」

というのが精一杯だった。

夜、里子がエコー写真と母子手帳を見せてくれた。

どれが赤ちゃん？

まったく見方がわからず実感のない史郎をよそに、里子はすっかり
「お母さん」気分に浸っていた。

「男の子かな？女の子かな？名前はとうしょうか？」

女性ってすごいな。

もう母性愛が生まれてるんだ。

男は生まれてこないと実感がないのかな？

気分がよい里子を見ながら史郎は思った。

悲しい別れ

「明日病院でしょ。今日仕事休みだから久しぶりに買い物に行こうか。」

史郎が里子を誘って買い物に出掛けた。

小雨が降っていて店の中の床が濡れていた。

里子は濡れた床にとられ足を滑らし転んでしまった。

「里子！！大丈夫か？お腹は？」

「ちよっとお腹うったかも…。でも大丈夫。ごめんね。気をつけて歩いてたつもりだったけど…」

史郎は泣きそうな里子を支え

「今日は帰ろう。明日病院でちゃんと診てもらうんだよ」

といい2人で家に帰った。次の日、一番で病院へ行き受診した。

内診を終え診察室へ戻ると、いつもにこやかな先生の顔が今日はない…

「坂上さん、先ほど診察させてもらったのですが…。赤ちゃんの大きさが前回と同じで大きくなっていませんでした。心拍も確認できませんでした。」

……えっ……そんな！

「昨日転んだのが…」

「さっきお聞きしたお話ですよ。いえ、赤ちゃんの大きさからすると前回診察した後に成長が止まったとみていいと思います。」

続けて先生は説明をした。

「先ほど検査しましたが、正常妊娠はこの数値以上なければいけないのですが、坂上さんの数値は大分低いんです。この数値ですと残念ですが、流産となります。」

……流産。そんな……

先生の声が遠い…。

「お腹の中に長く残しておくとも体に影響が出ます。できれば早く出してあげて下さい。明日にでも手術できますが…」

「…はい。お願いします。」

そこには意外と冷静にいられる里子がいた。

先生の言葉を聞いても、明日の手術前の処置をされても、涙は出なかった

「これから入院して明日の朝手術になります。

ご主人に着替えなどを持ってきてもらえますか？」

史郎に電話をして事情を話し着替えも頼んだ。

里子は案内された病室のベッドに横になり白い天井を見つめた。実感がないのかまだ涙は出なかった。

「…うん、うん。わかった…。じゃあ後でね。」

あんなに喜んでいたのに。

「よう。暗い顔してどうした？今日飲みに行くんだけど一緒にいかないか？」

電話の後、様子がおかしい史郎に同僚が声をかけた。

「悪い、奥さんの体調が良くないんだ。今日はすぐに帰るわ。また誘ってくれよ。」

「もしかしてつわりとか？…そっか。奥さんお大事にな。」

人の事情も知らないで！そんな事いうんじゃないよ！

同僚のその発言にムツとしたが、顔には出さず（いや、出たかも）そのまま仕事に戻った。

仕事を定時に終わらせ自宅へ急いだ。家に着くと里子に頼まれた着替えと必需品をカバンに詰め込み、急いで里子の待つ病院へ向かった。

病院に着くと史郎は看護師に説明を受けた。

里子の前には夕食が運ばれてきていたがなにも喉を通らない。

事情を知っている看護師がご飯をおにぎりにして持ってきてくれた。

「おにぎりにしてきたから食べられる時に食べてね。今回は残念だったけど…」

明日の手術もすぐに終わるから、ちゃんと食べて赤ちゃんにバイバイしよう。お母さんが悲しいと赤ちゃんも悲しむよ。」

看護師の言葉を聞いて、明日赤ちゃんと別れなければいけないという現実を目の前に突きつけられ、里子の中の何かが崩れた。不安感が突然の悲しみになり里子は嗚咽しながら泣き出した。涙が止まらない。

嗚咽する里子の肩を包み込み看護師は優しく背中を撫でてくれた。

「大丈夫、お母さんのせいじゃないよ。赤ちゃんだってお母さんのところにこれで嬉しかったと思うよ。大丈夫、大丈夫。今は泣きたいだけ泣けばいいよ。」

優しい声で落ち着かせてくれる。

史郎が部屋へ案内されると里子は泣いていた。

「奥さん、自分のせいだと言って……後悔と不安で辛かったんだと思います。落ち着かせてあげて下さい。」

看護師に事情を聞き里子のそばへ行った。

看護師と交代した史郎は泣いている里子を優しく抱き締めた。

「ごめんね……ごめんね、赤ちゃん…赤ちゃんが……。赤ちゃん守ってあげられなかった！ウチが転んだから…」

「さっき先生から話を聞いたよ。大丈夫、里子のせいじゃないよ。」

史郎は泣きじゃくる里子を優しく抱き締めながら背中をさすり続けた。

何十分たっただろう。里子は落ち着いてきた。

「大丈夫？落ち着いてきた？」

「…うん、ありがとう。いっぱい泣いてすっきりした。赤ちゃんには笑顔でバイバイ言わないとね。泣いたらお腹すいちゃった…」

「じゃあ、おにぎりたべればいいよ。飲み物買ってくるね。」

部屋を出てた史郎は、自動販売機の横の椅子に座り声を押し殺ししばらく涙を流した。

その晩は、二人の悲しみを包み込むように外は季節外れの雪が降り、白い花が咲くようにうつすらと積もり始めていた。

翌朝、里子は手術をした。
妊娠9週。小さな命は天国へと帰っていった。

家に帰ったら安静にし、1週間後術後の経過を診る為に病院に来るように言われ、その日の午後退院した。

家に帰ると史郎がお茶を入れてくれ「ちゃんと寝てろよ」と言い残し買い物に出掛けた。

史郎が出掛けている間、里子はなにも書かれなかった母子手帳と予定日の書き込まれたカレンダーを壁から外しそつと机の奥にしまった。

命、再び

一年後、里子は再び妊娠した。

うれしい。だけど怖い……素直に喜べない。喜びよりも不安が大きい。前回の事が頭をよぎり里子を不安にさせた。

またダメになったらどうしよう……

「そんな事考えちゃダメだよ！」と史郎に怒られたが前回の事が頭から離れない。

自然と病院へも足が遠のいた。

妊娠発覚一週間後、やっと病院へいく事ができた。

「こんにちは。お久しぶりですね。」

先生と看護師は里子の事を覚えていた。

「診察の結果、今5週目に入ったところですね。まだ小さくて赤ちゃんは見えませんが。2週間後にまた来て下さい。今度は頑張りましょうね。」

先生は里子の手を握りしめ言った。

2週間がとても長く感じた。細心の注意を払って2週間を過ごしたのち、不安でいっぱいな気持ちで診察室へ。

「そんな顔しないで大丈夫。赤ちゃん大きくなってたよ。心拍も確認できたし次回は母子手帳持ってきてね。」

里子是不安気持ちを先生に打ち明けた。

「前回の妊娠が9週でダメになっちゃったので不安で…」

先生はカルテを見て言った。

「そうだね、不安だよ。でも続けていなくなる人は少ないから。少しでも不安な事があればいつでも来て。電話でもいいから。いつでも待つてるからね。」

- - いつでも待つてるからね。

先生のその言葉に不安感が緩んだ。

次の健診日。

初めて母子手帳に赤ちゃんの事が記入された。

これからこの手帳は赤ちゃんの成長で埋め尽くされるんだろうな。

里子は嬉しかった。月日がたつにつれ、母子手帳は赤ちゃんの成長が書き込まれうまってい

そして、順調に大きくなっていくお腹。

5ヶ月を過ぎた頃には胎動を感じるようになり喜びが増した。

元気に動く赤ちゃん。毎日お腹に話し掛けてる史郎と里子。毎日が幸せに満ちあふれていた。

更に月日はたち出産予定日を4日過ぎた朝。

里子は史郎立ち会いのもと陣痛に耐えていた。

分娩室に入って何時間がたっただろう。

あまりの陣痛の痛さに里子の体力も限界に近づいていた

「もう一息で赤ちゃんに会えるわよ。頑張つて！はい、いきんで！」

朦朧とする意識のなか最後の力を振り絞った

「おめでとつございます。男の子ですよ。」

里子は元気な男の子を出産した。

外は昨日までの雨が嘘のように、雲一つないすっきりとした青空が広がっていた。

看護師さんは生まれたばかりの赤ちゃんを胸の上に抱かせてくれた。

「初めまして、赤ちゃん。やっと会えたね。」

「初めまして、パパでちゅよ。」

史郎の赤ちゃん言葉に里子はちょっと引き気味……

そんな様子を『晴^{はる}』と名付けられた赤ちゃんはちらっと目を開け二人を見ると、大きなあくびをして寝てしまった。

「里子、お疲れ様。俺達の赤ちゃんを産んでくれてありがとう。」

無事出産という偉業を成し遂げた紀代子を史郎はねぎらった

「なんか俺も一緒生んだ感じ……疲れた……」

みると里子にも負けず劣らず、汗びっしょりになっている史郎を見て里子は笑った。

「ぶっ！史郎もお疲れ様」

「さて、みんなに連絡してくるね」

史郎はそれぞれの両親に電話で報告。しかしあまりに興奮してたため

「里子が産まれたよ！」と言ってしまった。

電話の向こうでは「？」の顔。間違いに気付き
赤ちゃんが無事生まれたこと、母子共に健康である事改めてを報告
した。

連絡をうけた子の両親は初孫の誕生を喜んだ。

特に父親はとても喜んだ。連絡を受けた10分後には病院へ向け車
を走らせていた。

病院に到着した里子の両親は史郎に案内され早速ハルと初対面。

新生児室のガラス越しにハルを見た父親は

「おおーっ。かわいいなー！」

と歓喜していた。一旦病室へ行き里子をねぎらったが、直ぐに新生
児室の前に戻って行った。

「やっぱり娘より孫がかわいいよね…。」

病室で母親とこんな会話がされている事はつゆしらず、その後父親
は1時間近くも新生児室の前から離れなかった。

初めての育児

入院中はオムツの替え方から授乳の仕方、これから赤ちゃんとも暮らす上でのいろんなことを教えてもらった。

「育児は本に書いてあるとおりにはいかないものよ。寝るのも飲むのも一人一人違うんだからね。つまづいた時は、いつでも相談にのるからね」

看護師に言われた言葉と一抹の不安を抱え、里子とハルは1週間後無事一緒に退院した。

これから3人での新しい生活が始まる。

初めての育児は想像以上に厳しいものだった。

退院後三日も経たないうちに里子は痛感した。

ハルが泣けばオムツを替え授乳し寝かせる。

昼夜問わず1時間おきの授乳にオムツ替え。

朝は史郎の朝食と弁当を作り送り出し、ハルが寝ている隙に家事をすませるのは一苦労だった。

予想以上の寝不足により一週間たった頃、里子の目の下には「クマ」が出没していた。

「はあ…」

鏡を覗いた里子は大きな溜め息混じりで鏡に映った自分に語り掛けた。

「すごいクマ それにしてもひどい顔だねー。それにしても眠いー！」「ハルはあんまり寝ない子らしい。ハルが寝てるうちに一緒に寝ないと体力がもたない。」

「フニャー…」

浅い眠りから覚めたハルが里子を呼んでいる。

「あつ起きちゃった…。はいはい、今行きますよー。」

里子は「ハル王子」の呼び出しを受け急いで王子の元へ向かった。

バスタイム

里子も慣れない育児に奮闘しているが、史郎も奮闘中だった。

史郎はハルのお風呂担当である。

残業にならないようせっせと仕事をこなし、定時には颯爽と会社を後にする。

疲れて帰ってきた後のハルとの入浴は格別なものがある。

まずは湯船のお湯の温度。湯船に浮かべた温度計と史郎の手でチェック。温からず熱からず。

すでに史郎はハルが一番気持ちよく入れるベストな温度を熟知していた。

次はタオルの用意。

ハルの体を優しい洗うガーゼのハンカチ。ハルが湯船の中で不安にならないための胸にかけておくタオル。湯上がりのハルを優しく包む柔らかいバスタオル。

最後に石けんを用意。赤ちゃんの繊細な肌を優しく洗い上げる専用のベビーソープ。

全ての用意が済んだらまず史郎が体の隅々まで念入りに洗う。
湯船に入りお湯の温度を最終チェック。「いいよ」

裸になったハルを里子から預かってレッツバスタイム。

胡座あぐらをかいた膝の上にハルを乗せ怖がらないようにお湯をかけてやる。

頭を洗いガーゼで優しく顔を拭く。よく泡立てた石けんで優しく体を洗っていく。最近はやくなれたものの、最初は悪戦苦闘だった。

まだふにやふにやの体の上、石けんをつけると滑ってしまい何度かヒヤツとしたことがある。

丁寧に体を洗った後はしっかり抱いて湯船の中へ。耳に水が入っては大変。ここでも気を抜かないよう細心の注意をはらう。

しっかり耳を塞ぎ軽くお尻に手を添えて温かなお湯にハルの体を委ねる。「ふーっ。気持ちいいな、ハル」

お湯の温かさにつつとりと目をつむるハル。

「父ちゃん最高だよ！」

と言ったか言わないか、史郎にはそう聞こえるらしい

「そうか！気持ちいいか！父ちゃんもハルと入る風呂は最高に気持ちいいぞー！！今日はどうだった？いっぱい寝ていっぱい飲んだか？」

男同士の会話は進む

「今日はいいい天気だったよな。もうちょっと大きくなったら一緒に散歩に行こうな、外は気持ちいいぞ。」

史郎の独り言を聞きながらハルはお風呂の気持ちよさに大あくびをした。「おーい、出るよー。」

バスタオルを持って風呂場に来た里子にハルを渡し、史郎もすぐに風呂から上がった。

「お風呂お先。ふーっ、気持ちよかった。」

ビールを片手に部屋に入ると、里子が頬をほんのりピンク色に染めたハルに服を着せ終わったところだった。

「さて、お風呂上がりの一杯と参りましょうか。」

史郎はビール、ハルは母乳で喉の渴きを潤した。

成長

慣れない育児に悪戦苦闘しながらも、2〜3ヶ月が経つ頃にはだいぶ生活リズムができてきた。

ゲップの出し方もうまくなってきたし、話し掛けながらオムツを変えたり楽しんで育児ができるようになってきた。

母乳やミルクも上手に飲めるようになり、体重も徐々にではあるが増えてきた。それからのハルの成長は目まぐるしいくらいだった。

首がすわり縦抱きができるようになり、話し掛けると時々笑うようにもなってきた。

うつ伏せにすると手足をバタバタ。手足をピンと伸ばした「飛行機のポーズ」がお気に入りだ。

デジカメにはハルの一挙一動の記録が大量に保存してある。

寝返りの途中で止まってしまい戻れなくて泣いてた日、手が抜けなくて泣いてた時もあったがとうとう、右にしか廻れないが寝返りもマスターした。

人間欲が出るもので、早く首がすわらないかなーと思っていても、

いざ首がすわると次は寝返りだ！となってしまうもの…
「すごいねハル！ゴロンって出来たね。」

ハルの寝返りに手を叩いて誉める里子

誉められてまんざらでもないハルはニコツと笑顔になる。

「もーハルってばかわいいっ！」

ハルを抱き上げほっぺにキスをする里子。

心の中ではつつい

「よし！次はお座りかハイハイだ。がんばれハル」
と思ってしまう里子だった。

ハルが生まれてからのこの1年は里子とハルにとって『初めて』
くしの年だった。

初めての出産に初めての育児。

初めての高熱に慌てふためき初病院。がんばって飲ませた（飲まされた）初飲み薬。

何度もやった初（予防）注射。

初めてハルが嘔吐した時は真夜中で、夜間診療にかかった事もあった

た。辛そうなハルを見て里子の方が泣きそうだった。

下痢がなかなか治らず、お尻が真っ赤になってしまった事もあった。たくさん動いて、おでこをすりむいたり寝返りに失敗して柱に頭をぶつかったり…

いっぱい遊んでいっぱい食べて、そしていっぱい寝て。

そんなハルもあと少しで1才を迎える。

新しい家族

ハルが可愛いお尻をフリフリしながらハイハイをするようになってしばらく経った頃、里子のお腹には新しい命が宿った。

つわりはあったが、元気なハルを追いかけていたため、気分の悪さに気を回せず軽くすんだように感じた。

1才をすぎた頃にはハルも歩き始め、さらに追いかけるのに一苦労。あつと言つ間につわりのつらい時期を乗り越えた。

妊娠6ヶ月目の健診の日病院を訪れた時先生に

「そろそろ赤ちゃんの性別が分かりますが、どうしますか？」

と聞かれた。

ハルの時も性別は生まれからのお楽しみにしていたので

「生まれからの楽しみにしているので教えないで下さい。」と里子は答えた。

先生は「わかりました。ではエコーをお腹の赤ちゃんを見てみましょうね。」といい健診開始。

里子と一緒に健診のベッドに乗り、不思議そうにエコーを見るハル

トクトクトクと赤ちゃんの心音も元気よく聞こえる

エコーが終わり服を直して先生の前の椅子に座る里子とハル。

「赤ちゃん元気いっぱいだよ。順調だね。性別もばっちりわかったからね。お母さんには生まれからのお楽しみ」机に向かって健診結果を書いている先生。

その時里子は耳にする。

「……男の子つと」

先生！……！！

聞こえちゃったよ！

書きながら小声で言っちゃった…

ああ、お楽しみが……でも無事生まれてくれれば性別はどっちでもよかったし

男の子は大歓迎だし。

聞こえなかったふりをして健診終了。

聞こえちゃった事は里子とハル2人の秘密にして、史郎には生まれるまで内緒にしておこう。洋服選びは男の子色ばかり買わないよう慎重に。

まあ、ハルのおさがりがあるからあまりいらないけど。

その後の経過も順調にいき、ハルを抱っこするときは大きなお腹に乗っけるようにしていた。

お腹の赤ちゃんは分るのか、里子がハルを抱っこすると「兄ちゃん！重いよ〜」と言っているかのようにお腹の中からキックやパンチを繰り返した。

その後の健診も問題なく予定日を4日過ぎた日の深夜、里子はお腹の痛みで目が覚めた。

しばらく痛みの間隔を計り様子をみていたがどうやら陣痛のようだ。病院に電話をして、経過を報告すると「すぐにきて下さい」と言われ、寝ていた史郎とハルを起こし荷物を持ち病院へ急いだ。病院へ向かう車の中で徐々に陣痛の間隔が短くなり痛みも強くなってきた。眉間にしわを寄せ痛みを耐える里子。

「大丈夫か？急ぐから頑張れ！！」

史郎は迅速かつ安全に車を走らせた。病院につくと看護師が待っていた。

「痛みの間隔は？おしるしや破水はあった？」

里子に質問しながら分娩室へ向かった。

残された史郎は眠っているハルを膝に抱き廊下の椅子にすわって待っていた。

こんな時、男って待ってるだけしかできないんだよな…

史郎はなにもできない歯がゆさに少々苛立ちを感じた。しばらくして「坂上さん、奥さんがお呼びですよ」と看護師が史郎を呼びに来た。

「はい。あつ、でも…」

と史郎は膝の上で寝ているハルを見た。

「お兄ちゃん寝ちゃってるのね。じゃあ、こっちのベッドに寝かせてあげて。看護師がいるから大丈夫よ。」

旦那さんは奥さんのそばについていてあげて」

と分娩室の隣の部屋の空いているベットを指差した。

「ありがとうございます」

史郎はハルをベッドへ寝かせ里子の元へ向かった。

史郎は分娩着（帽子とエプロンのようなもの）を着て分娩室へ入った。

分娩室では出産前の準備（点滴や分娩着への着替え）を終えた里子が分娩台の上で陣痛に耐えていた。

史郎は里子の陣痛の波が引くのを待ってから声をかけた。

「もうちょっとだな、頑張れよ。はい、リップとお茶」

ハルの時は何をしていたか分からずただオロオロするだけで看護師には邪魔扱いされ、結局里子の手を握ってやる事しかできなかったという苦い経験がある。

なので今回はリップクリームとストロー付きの飲み物を持参し準備も万全で出産（の立ち合い）に臨む史郎であった。

「ありがとう。のど乾いちゃったよ」

里子は差し出されたお茶を飲み乾いた唇にリップを塗ってもらった。

「あれ？ハルは？」

看護師のはからいで隣の部屋にいる事を告げた。

「そう。じゃあ安心して産めるわ。今回は……（陣痛が）きたからちよつと待って……………」

陣痛の波のが去った後、横にいる史郎と雑談をするという前回にはない余裕をみせる里子。

「赤ちゃん、だいぶおりてきたよ」と助産師に言われ余裕をみせていた里子だったが、いよいよ会話どころではない状態になってきた。激しい陣痛が休みなく襲ってくる。

「これで終わりだよ。最後にもう一回頑張って」

「おめでとうございます。男の子ですよ！」

その日は凜とした気が張りつめ月が美しい夜だった。

生まれた新しい家族には『良夜^{リヨウヤ}』という名前が付けられた。

生まれたばかりの良夜を胸の上に置かれカンガルーケア。

「初めまして、リヨウ。会いたかったよ。」

リヨウは小さな手で里子の人差し指をギュツと握った。

里子は出産後様子を見るため分娩室でしばらく休んだ。

数時間後病室へ移されると、そこにはまだ夢の世界にいるハルと産湯につかりきれいになったリヨウが史郎に抱かれていた。

「お疲れ様。赤ちゃんって小さいなー、ハルもこんなに小さいかったんだよなー」

「そうだねー、ハルも大きくなっただね」

2人は寝ているハルとリヨウを交互にみて微笑んだ。「史郎はどっちが生まれると思った？」

里子が聞くと

「そうそう！その事なんだけどさ…」と史郎が話しをした。

ハルをベッドに寝かせて里子のところに行く時見送る看護師に

「次の子も男の子ですってね」と言われたらしい。

史郎が「えっ？男の子なんですか？」と聞き返したところ看護師が

気まずい表情で

「あらっ！内緒だった？ごめんなさいっ」と性別をばらしてしまっ
たらしい。2人が話していると眠っていたハルが目を覚ました。

「ハルおはよー。ハルは今日からお兄ちゃんだよ」

里子は生まれたばかりのリヨウをハルにみせた。

「弟のリヨウだよ。お兄ちゃん初めまして」

里子に抱かれたリヨウを見てキョトンとするハル。「ママ、あーた
ん？」

（里子達は、お腹にいる赤ちゃんを「あーちゃん（赤ちゃん）」と
呼んでいた）

ハルは自分のお腹をポンポンと叩いてみせた。

「うん、そうだよ。赤ちゃんだよ」

まだ理解できないハルは里子のお腹もポンポンと叩いた。

あれ？おなかぺったんこ…なんで？

何度も里子のお腹を叩いて確認するハル。

「ママ、ポンポン！ポンポン〜！」

「ハル、痛いよ」しばらくするとハルはリヨウの顔を覗き込んだ。

ママに抱かれてるこれはなんだろう？どこからきたんだろう？ママのお腹がぺったんこなものなにか関係あるのかな？お腹のあーちゃんはどこ？

いろいろ考えながらリヨウのほっぺをつついてみた。

寝てるみたいだけど……

ハルがリヨウの事を認識するまでしばらく時間がかかりそうだ。

亀裂

里子の入院中、会社に育児休暇をもらった史郎がハルの面倒をみていた。

毎日お見舞いに来てくれたが、ハルは病院のベッドが怖いのか里子がいても決してベッドには近づかなかった。

入院中は両親や友達がリヨウを見にやってきたり、退院後の睡眠不足のために寝溜めをしたりして一週間がすぎた。
ハル同様黄疸がでたが、無事リヨウと一緒に退院することができた。

そしていつの間にかお互いを「パパ、ママ」と呼ぶようになっていた。

家にかえりリヨウをベビーベッドへ寝かせると、早速ハルがベッドの柵越しにリヨウを観察し始めた。

夜はささやかながらお祝い。史郎はビール、里子とハルはりんごジュースで乾杯した。

これからは昼夜問わずのリヨウのお世話に加え、今回は元気いっぱい遊び盛りのハルの相手もしなくてはならない。

寝不足と片付かない家事にストレスが貯まりはじめた頃、里子と史郎の間に亀裂が入るような出来事が起きた。

その日もリヨウのお世話をしながらハルの相手をしてた。

片手間の遊びの相手では全く満足しないハルは、夕食後、リヨウに授乳をしている里子にまわりついていていた。

「リヨウのおっぱいが終わったらね、ちょっと待っててね」

まわりついてくるハルに言い聞かせるように言ったが、とうとうハルはぐずり始めてしまった。

寝転がりテレビを見ていた史郎の後ろ姿に

「いつもこんな風にやってるんだよ」と言つと

「いやだつたら明日から保育園にでも入れれば？」

テレビを見たまま振り向きもせず史郎は言い放った。

その言葉は睡眠不足と育児ストレスで疲れ切っていた里子の心に深

く突き刺さった。

そんな言葉を聞くために言ったんじゃない。ただ毎日こんな風にしてるんだよって言っただけなのに。私も頑張ってるんだよって言いたかっただけなのに…。

「大変だね、お疲れ様」という言葉が欲しかった。ちよとだけでもいい、優しい言葉が欲しかった。悔しくて涙がでた。溢れ出た涙を拭くことなく里子は授乳を続けた。

そんな里子の事など知らずに史郎はテレビを見ながら寝てしまった。

置き手紙

次の日仕事から帰ってきた史郎は、いつもは点いている玄関の外灯が点いていないことに気がついた。

疲れて寝ちゃったのかな？

そんな事を思いながら呼び鈴を押したが反応がない。

何度か呼び鈴を押してしばらく待ったが誰も出てこない。
仕方なく自分の鍵を取り出し玄関を開けた。

「ただいまー。」

いつもなら廊下を走り史郎を出迎えてくれるハルの姿もない。それどころか家の中が暗く人の気配はない。

不思議に思いながら台所の電気を点けると、ダイニングテーブルの上に紙切れが一枚…

「しばらく実家へ帰ります」

紙切れを手に史郎は呆然とした。

なぜ？

何があつた？

俺が何かしたか？

なんでだ？

頭の中で考えてみたが史郎には思い当たる節がなかった。

とりあえず里子の携帯へかけてみた。

「お客様のおかげになつた電話は電波の届かない……」

携帯を切っている。それならばと里子の実家へかけてみた。

「……こんばんは。夜分遅くにすみません、史郎です。えっと……里子
はいますか？」

義母が里子を呼んでくれた。

「……里子！？あつすみませんお義母さん……。はい……はい、そう
ですか……。いえ、きつと何か勘違いをしているのかと……。……分
かりました。ではよろしく願いします。夜分遅くに失礼しました。
……はい、おやすみなさい」

里子は電話に出なかった。

それどころか、電話にはでたくないと言ったそうだ。

義母の話によると、今日の午前中に突然ハルとリヨウを連れてやってきたらしい。そしてしばらく泊めてほしいと。

理由を聞いても何も言わないそうだ。

何かとても思い詰めている様子だったらしい。

史郎はネクタイをむしり取りソファに座ると考え始めた。

今朝はいつもより口数が少なかったけどいつも通り送り出してくれた。

今朝じゃなかったら昨日？昨日はなにをしたっけ？

休みだったから遅くまで寝てたな…。まあ、それは毎週同じ…。

そういえば午前中にみんなで買い物に行ったな。別に変なものは買っていないし。

午後のはんびりとテレビみながらゴロゴロして、ハルとも遊んだ。久しぶりのスキンシップ、楽しかったな。

夕飯も相変わらず美味かったし…

里子も普段と変わらなかったと思う…

昨日じゃなければもっと前？なんかあったか？

「あー！！なんだ？何でだよ。なにが不満だったんだ！」

里子がいくら考えても思い当たる節は思いだせなかった。

もう考えても埒があかない。

適当に夕飯を食べ風呂を沸かし湯船に浸かった。

いつもはリヨウを入れた後にハルが入ってくる。だが、今日はひとりだ。風呂場が広く感じる。

理由

一週間たつても里子が帰ってくる様子はなかった。相変わらず携帯は繋がらない。

毎日愛妻弁当を持ってきていた史郎が、ここ一週間コンビニ弁当だ。

何かあったな…

周りの人はみんな思っていたが事情を尋ねる人はいない。

里子が突然家を出て二週間が過ぎたある日。

「まだ帰ってきてないの？」

昼食後、自動販売機の紙コップのコーヒーで一服していると同じくコーヒーを手にした女性同僚につつかれた。

「いろいろと考えてみたんだけど思い当たる事がないんだよね…」

同僚は向かいの椅子に座ると続けて聞いてきた。

「奥さん普段は家でずっとお子さんたちと一緒によね？相当ストレス溜まってたんじゃないかしら？」

この言葉に史郎は反論した。

「子供とずっと一緒にいるのは当たり前じゃないか、母親なんだから。俺は外で仕事してんだからさ」

「その考え違うと思うわ」

史郎は手元のコーヒーから同僚に目を移した。

「仕事してるって言ったって、他の人としゃべれるし外に出るでしよう」

同僚は話し続けた。

「子供の相手をしながらその間に家事もやらなきゃならないし。誰とも話しをしないでずーっと家の中って意外とストレスたまるものなのよ」

周りで聞いていた他の同僚も話に入ってきた。

「疲れてるのは外で仕事してる人だけじゃないんだと思う。家にいるから楽だろうって思っていない？疲れているのはお互い様だと思うの」

男性と女性では考え方が違うものだ。

「そうだけど」

残り少ないコーヒーを揺らしながら史郎は言った。

「仕事している人は仕事が終わった後は自由な時間。だけど主婦は寝るまで仕事（家事）。しかも、坂上君の奥さんは今、夜間も授乳やらオムツ替えやらであまり睡眠がとれていないんじゃないかし

ら？」

女性側からの意見が続く。

「家に帰って家の中が片付いてるのも、すぐにお風呂にはいれるのも座れば夕飯が出てくるのも奥さんがやってくれるからじゃない？この二週間家に帰って思わない？」

「……………」

「奥さんに感謝してる？その感謝を言葉にしてる？言葉ってとても大切よ。言葉一つで傷つくこともあるのよ。」

「気がつかないうちにひどいこと言ったんじゃない？」

一方的に女性側の意見を押し付けられている様で史郎は苛立ち、飲み終わった紙コップを握りつぶしながら「例えば？」と質問した。

「俺は仕事して疲れてるんだ！とか、ずっと家にいてお前は楽でいいな〜とか」

いつの間にやら他の女性同僚も参加している。

「昼寝してんだろ！とか。」

「そうそう。」

女性が増えてきたせいか話の中心がズレてきて話題は「男性への不満」に切り替わり、話が盛り上がりつつある。

一緒にいた男性同僚はいつの間にかどこかへ消えていない。
この輪から一刻も早く逃げ出さなければ…

女性達の白熱した話しは続く。

「あと、ちよつと育児の愚痴を言っただけで「だったら生まなきゃよかっただろ！」っていう人！！最低よね」

「最低！！」

もうこの話しには入っていけない。史郎は静かに席を離れた。

ひとりで考えていても、里子が出て行った理由が何一つ思い出せない。

直接里子にあつて話を聞こう。

次の土曜日、史郎は里子たちがいる里子の実家に行った。

呼び鈴を鳴らし玄関先でまつ史郎。

突然の史郎の来訪に玄関へ出てきた里子の母親が驚いていた。

「おはようございます。土曜の朝からすみません。里子と話がしたくて……」

史郎の声を聞き、奥の部屋へからハルが顔を出した。

「パパ！」

満面の笑みで史郎へと駆け寄るハル。二週間見ない間にずいぶん大きくなったように感じる。

「ハル。元気だったか？ずいぶん大きくなったな。」

久しぶりにハルを抱き上げその重さに史郎も笑顔になった。

ハルを抱いたまま奥の部屋へ通されるとそこには、久しぶりに合う里子とリヨウがいた。

随分大きくなったリヨウを見て史郎は驚いた。

「リヨウ、大きくなったな」

思わず口にした言葉に里子は

「……うん。」と返事をした。

二週間ぶりに交わす夫婦の会話だった。

ハルはおもちゃや絵本を持ってきてあれこれと史郎に説明し始めた。

一生懸命に説明してくれるハルに

「ハルはいつばいお話できるようになったんだね。すごいな。すっかりお兄ちゃんだな。」

と胡座の上に座っているハルの頭を撫でながら言つとハル笑顔で史郎の顔を見上げて「うん！」と元気いつぱいの返事を返した。

しばらくおもちゃで遊んびながら史郎にまわりついていたハルだが、里子の母親が気を利かせてくれ「ハル、ばあばと一緒におやつ買いに行こうか」と何気なくハルを連れ出してくれた。

2人つきり（リヨウは部屋の隅でお昼寝中）になった里子と史郎。お互い相手が口を開くのを待っているかのように重い沈黙が続いた。

このままじゃ埒があかない

すでに冷めてしまったお茶を飲み干し史郎が口を開いた。

「里子：突然出て行つた理由を教えてくださいな？俺なりに考えたんだけど、思い当たる事がわからないんだ」

里子は顔を上げて

「言葉は大切な。何気ない一言が人を傷つけることもあるの」

そこまで言つと里子の瞳からは大粒の涙がこぼれ落ちた。

「言つた本人は覚えていなくても……言われた人はずっと覚えてい

るの」

真っ直ぐと史郎を見据えて里子は手の甲で涙を拭った。

「もちろん史郎は覚えていないでしょうね。」

涙を溜めた目で里子は皮肉たっぷりの笑顔で黙っている史郎に言った。

史郎は戸惑った。里子を泣かせるほどひどい言葉を俺が？
里子には悪いが全く思い出せない……。

「悪かった……」

「悪かった？自分がなんて言ったかわからないのに謝るの？正しい事を言ったかもしれないのに？」

「そ、それは……。ごめん、本当に思い出せないんだ。」
申し訳なさそうに史郎がいう。

「なにをすれば許してくれる？戻ってきてくれる？」

気持ちが不安定になっている里子を刺激しないように優しく声を掛けた史郎だったが、里子は涙をためた瞳でキッと史郎を睨んだ。

「あの言葉は一生忘れないし、何度謝られても許さない！」

どちらかと言えばおとなしめな性格の里子の口から出た言葉に史郎は驚いた。

しばらくの沈黙の後、気持ちが落ち着いたのか里子が小さな声で話始めた。

「……ただ話を聞いてほしかったの。一日中子供の相手と家事で気がつくとも1日が終わってるの。史郎が帰って来ても寝てしまった後は取り残されたみたいで淋しかった。自分は何のためにここにいるんだろう？って。」

時折流れ落ちる涙を指で拭いながら、小さな声でしゃべる里子。史郎はその言葉を聞き逃さないように静かに聞いていた。

「史郎が仕事で疲れているのは知っていたけど、もっと私の話を聞いてほしかった。嘘でもいいから「頑張ってるね」って言ってほしかった……家事育児をしているだけでまるで家政婦みたいな生活がいやだった。」

言われてみれば仕事から帰ってきててもハルやリヨウには話しかけていたが、里子と会話らしい会話はしていなかった。

里子の話相手もしてなかった。

「ごめんね……こんなのわがままだよ。謝るのは私。なんにも言わずに出てきた私が悪いの。」

「いや、里子の気持ちに気がつかなかった俺も悪いよ。辛かったよ

な、ごめんな。」

もう涙は出ていない。

「こんなわがままな私だけど、史郎の所に戻ってもいいかな？」
里子が恥ずかしそうに言った。

「いや、それを言うのはこっちの方だよ。里子、俺のところに戻ってきてくれるか？」

「うん。」

やっと笑顔になった里子と史郎。

「たらいま〜」

ハルが大量のおやつが入った袋を手に帰ってきて机にお菓子を出し
パパのママのハルのと分けたした。

「あら、いい顔になったじゃない」と里子の母親が二人を見て言った。

「ごめんねお母さん。」

「夫婦ケンカはいつぱいしなさい。そして必ず仲直りすること。」
につこりと微笑んで人生の先輩として助言した。

「史郎くんも夕飯は食べていくでしょ？明日までお父さんは出張だし、今晚一人で食べるのは寂しいわ。」

非常に断りにくい言い方をして史郎を強引に食事へ誘った里子の母。

夕飯をご馳走になり、何気なく出されたビールに口を付けてしまい車の運転ができなくなった史郎は結局里子の実家に一泊する事になった。

修復

次の日の午前中、里子とハルとリヨウ、荷物を乗せた史郎が運転する車は自宅へ向かっていた。

玄関に入る前に史郎が「ごめんね」と言った。里子は「何が？」と聞き返したが史郎は笑うだけ。
家に入るとその意味が分かった。

「なにこれ？」里子は目を丸くして言った。

脱ぎっぱなし服に、山になった洗濯物。台所のシンクには洗ってない食器やビールの缶。リビングにはよんだ空気がたちこめ、物置と化していたテーブルの上では荷物のなだれがおきていた。

「里子の毎日がどんだけ大変だったかこの数週間で分かったよ。一人でもこの有り様だ。やっぱりうちには」というか俺には里子が必要なんだよ」

ばつが悪そうに、散らかった洗濯物を拾いながら史郎は言った。

呆れてい里子だが笑顔になると

「さあ。天気もいいことだし片付けますか。はい、史郎も動く！」

里子が史郎のお尻を軽くペシンと叩くと里子の真似をしたハルが面白がって史郎のお尻をパシパシ叩き出した。

窓をあけ家の空気を入れ換える。史郎はハルと一緒に部屋の片付けをし、ベランダには久しぶりに布団が干された。庭では里子が干した洗濯物が風にはためいていた。

月曜日。

史郎が目を覚ますと隣に里子の姿はなかった。

まさかこの週末の出来事は夢だったのかと飛び起きたが、階下から漂ってくる朝食の香りが史郎を安堵させた。

顔を洗い朝日が差し込む明るいリビングへ行くと、奥のカウンターキッチンでは里子が朝食の用意をしていた。

「おはよう。」

「おはよう。」

テーブルに朝食を並べながら里子が熱いお茶を煎れてくれた。

「ありがとう。」

読んでいた新聞をたたみ熱いお茶を口に含む。

二人が和食好きなので朝食は和食、忙しくても朝食は必ずとるこの2つは坂上家の決まりだった。

しかし里子がない数週間、史郎は朝食と呼べる物はないなかつた。

今朝のテーブルには炊きたてのご飯に具だくさんの味噌汁、焼き鮭にたくあんなどが並んでいる。

数週間振りのまともな朝食に箸が止まらない史郎はむせてしまった。

「ちょっと、大丈夫？なに慌てて食べてるの？」

好物を目の前にした子供か！史郎は口を拭きながら思った。

支度を整え玄関で靴を履いていると「はい、お弁当。」とずっしりと重い弁当を里子が渡してくれた。

「あつ、ありがとう。」

お礼に頬へキスをしようとしたが華麗によけられる史郎。

「なにしてるの。行つてらっしゃい。」

優しく微笑んだ里子に見送られ史郎は久しぶりに颯爽と出勤した。

昼休み里子の愛妻弁当を食べている史郎が同僚たちにひやかされる事は必須だった。

事故

夏の気だるい暑さが多少残るが、心地よい風が吹き始めだいぶ過ぎやすくなった。

ハルもお兄ちゃんらしくなりリヨウは寝返りが出きるようになった。部屋の中をコロコロと寝返りで移動できるようなりリヨウの行動範囲は格段と広がった。

ハルは里子の真似をしているんなお手伝いをしてくれる。いま一番お気に入りのお手伝いは洗濯物を畳むこと。

かなりぐちゃぐちゃだが、洗濯物を畳んでいる里子の隣にちょこんと座り一生懸命畳んでくれる。

一緒に洗濯物を畳んでいると里子の携帯電話が鳴った。里子より先に鳴っている携帯をとりに行き持ってきてくれるハル。これも最近ハルのお気に入りのお手伝いだ。

「はいっ」笑顔で携帯を受け取り「ありがとう」とハルの頭を撫でる。

電話の着信相手を見ると父親の照良てるよしからだった。

「あらっ、めずらしい」

照良から電話が来るのは珍しかった。

あのケンカの事がバレた？

里子の父照良は厳しい人だ。

里子達のケンカの件を照良は全く知らない。和代が内緒にしてくれたのだ。

ケンカをし里子がしばらく実家にいたあの時、ちょうど長期出張中だったため照良は喧嘩の事も里子の実家にいた事も知らないのである。

その事を照良が知ったらなんと言われるか…きっと史郎も呼び出され二人揃ってみっちりお説教をされるだろう。

ビクビクしながら電話に出る里子。

「もしもし…」

「もしもし、里子か」

「うん、どうし……」

「母さんが事故にあった。」

「えっ……」

「いま手術中だ。」

事故？手術中？

里子は血の気が引いた。

「えっ……、お母さんは大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だと思う……その話はまた後で。父さん会社から直接こつちに来たから何も持ってきてないんだ。すまないが、家につて今から言う物を持ってきてくれないか？」

震える手でメモをとり、少し落ち着くと史郎へ連絡した後二人を連

れて実家へ向かった。

荷物を持ち病院へ着いた里子は受付で母の事を説明し病室を案内され荷物を置くと手術が行われている病棟へ急いだ。

「お父さん」

手術室の前の廊下に置かれた椅子に父照良の姿があった。急に老け込んだように見えた父に里子はドキツとした。

「里子か」

顔をあげた照は駆け寄ったハルを抱き上げて微笑んだ。

「荷物持ってきたよ」

手にした荷物を手渡すと照良は「ありがとう」といい受け取った。

「これから必要な手続きをしてからここを任せていいか？」

照良そう言つとその場を里子に任せ看護士を捜しに行った。

背中におぶったりリヨウは寝息をたててよく寝ている。

里子は見慣れない場所にキョロキョロしているハルを目で追いながら椅子に軽く座った。

ハルの相手をしていると手術室とは反対方向から急いでいる足音が聞こえた。

足音が近づきその主が姿を現した。

「お姉ちゃん」

「菜々子！」

多少息を弾ませた妹の菜々子^{ななこ}だった。

「お父さんから電話もらったんだけど…お母さんは？」

都内に勤める菜々子は照良から電話をもらつと、上司に事情を説明した。すると上司は「すぐに行つてやりなさい」と菜々子を早退させてくれたという。

「お母さんは？」

「うん、まだ中……」

手術室に目をやり里子は答えた。

「お父さんはいろんな手続きをしに行つてる」

「そう……」

とりあえずいま里子が知っている事を菜々子に説明した。

菜々子は里子に隠れるようにしているハルと目が合い

「ハルこんにちは。覚えてるかな？」

と言うと微笑んでハルに手を振つてみせた。

少し照れたように里子の顔を見上げるハルに「ななちゃんだよ」と里子が言つた。

「なな？」ちらつと菜々子を見てハルが小さな声で言つた。

菜々子はニコツと微笑むとハルにもう一度手を振つた。

二人は並んで座りお互いの近況報告をしていたが、だんだんと口数は減り自然と視線はドアの上で光っている『手術中』という文字と手術室のドアに向けられた。

「お母さん大丈夫だよ」

菜々子が聞くと里子は黙つて頷いた。

それから何十分いや、数分だったかもしれない。ドアの上で光っていた『手術中』の光が消えると共にとても長く感じた時間が終わりを告げた。

手術室からは手術を終えた和代が運ばれてきた。

里子たちは駆け寄り薬で眠っている和代に「お母さん」と声を掛けた。

「ご家族の方ですか？」

里子達を見ると、手術着をきた医師が言った。

「はい、娘です。父は手続きをする為席を外しています。母は大丈夫ですか？」

里子が答えると医師は

「手術は成功です。命に直接関わる怪我ではありません。ただ、骨盤を骨折しているので骨がつくまで、しばらくは動けません」

「入院期間など詳しい事は親御さんがきてから」と医師は言い、里子と菜々子はお礼をしてその場を去った。

術後の和代はICUに移され経過を見ることになった。

病室のガラス越しに和代を見ていた二人の元へ、医師から説明を受けた照良が帰ってきた。

骨盤骨折及び大腿骨骨折

あばらにもひびが入っているらしい。

事故は今日の二時過ぎ、買い物帰り自転車を押して歩いていたの

代を大学生の運転する車がはねたのだ。
原因はナビ操作によるわき見運転。

車は和代を跳ね飛ばしさらに和代を下敷きにして止まったらしい。
運転手が動揺し車から降りて呆然としている中、事故を目撃した人
達が救急車を呼び車の下から和代を救出してくれたらしいのだ。

お礼をしようにも「当たり前的事をしただけ」と手を貸してくれた
人達はその場を去ったという。

「怪我が完治しても以前のように歩けなくなる可能性があるみた
いなんだ」

「そんな……ひどい！」

菜々子が目に涙をため怒りに体を震わせて言った。

里子はガラス越しに和代を見つめながら身動きせずにその話を聞いて
いた。

「加害者が後日謝罪に来ると言っていたがお断りしたよ」
照良の目にも怒りがこみ上げていた。

「当然よ。たとえ来たとしても追い返すわ」

菜々子は怒りをあらわにした口調で気持ちをばきだした。

仕事を終えた史郎が病院に駆けつけた。

「里子」

疲れて里子の膝の上で眠ってしまったハルを起こさないように史郎
は里子に声を掛けた。

「疲れてるのにごめんね」

「いや。それよりお義母さんは？」

「今日明日は薬で眠らせちゃうつて……」

史郎の登場で張っていた緊張が解けたのか里子は静かに泣き出した。

「里子？お義母さんそんなに悪いのか？」

史郎は困惑し里子に聞いた

「うつん、ごめん。史郎が来たらなんか安心しちゃって。お母さんは大丈夫よ。でも骨盤を骨折してるから治るまでだいぶかかるそうよ」

「そうか」

なんと声をかけていいのかわからない史郎はそのまま黙って里子の横に座った。

面会終了時間になり病室から照良と奈々子がロビーへやってきた。

照良は史郎と里子の膝の上で寝ているハルをみた。

「史郎くん、忙しいのにすまないね…ハルも疲れちゃったか。悪かったな」

「いえ、とんでもないです。お義母さんは大丈夫ですか…」

少し和代の事を話した。奈々子はしばらく実家から会社に通う事になり、その日はそれぞれの家に帰る事になった。

次の日里子が病院へいくとちょうど白衣を着た照良が和代のベッドの脇にしていた。

和代は今日も断続的に痛み止めの薬を投与されており目が覚めていてもあまり意識がハッキリしない状態だ。

里子がガラス越しに見ていると、照良はまだ口から水分の補給も出ない状態の和代に、水を含ませたガーゼで唇をそつと濡らしてやっていた。

「かわいそうに……」

照良の口がそう言っているように動いた。

里子は廊下に出てひと息ついた。

あんな状態の母を見るのはつらい。憔悴している父の姿をみるのも辛かった。

しばらくすると照良が出てきて里子に気がついた。

「今来たところなの」

ハルの手を引き里子はリヨウの乗ったベビーカーを押し笑顔で言った。

里子と照良が話していると、事故の知らせを受けた和代の兄弟が駆けつけた。

「照良さん！」

「兄さん」

和代の姉の久恵ひさえと弟の節男せつおだ。

「家に電話したら、菜々子ちゃんが照良さんはこっちにいるって行ったから」

「姉さんは？」

「義姉さん節男君、遠い所すみません」

照良は二人を促し和代のいる病室へ案内した。

病室から帰ってきた久恵は「2、3日駅前のホテルに泊まってるから何かあったら連絡して」と言い帰って行った。

叔母達をロビーまで送ると里子は振り返り

「お父さん家帰った？」

と照良に聞いた。

「帰ったよ」

「帰っただけでしょう？寝た？食事は？」

返事のできない照良に里子のため息をついて

「ひどい顔よ。お母さんも起きた時お父さんがそんな顔じゃがつかりじゃない？少しはさっぱりすると思うから」

とひげ剃りやタオルなどが入った紙袋を照良に手渡した。

顔を洗いヒゲをあたると少しサッパリした気分になった。照良は病院の食堂へ行き軽く食事をした。

二日しかたっていないに久しぶりに食事をした気分だった。

外へ出て一服しているとポケットで携帯が鳴った。

「お父さん、あたし今日はこれで帰るね。家の方も片付けないといけないし。菜々子と相談して1日交代で病院行くことにしたから。またね」

ふと前を見ると、道を挟んだ向こう側に里子が手を振っている姿が見えた。ハルも一緒に両手を振っている。

「じいじー！バイバーイ」

フフッと笑いハルに手を振り返しながら「悪いな…助かるよ。気を付けて帰るんだよ」
と電話越しに里子へ言った。

「菜々子？病院にくる前にお母さんの着替えとタオル数本持つてきてくれる？お父さんどこにあるか分からないんだって」

次の日、里子は菜々子へ電話をしたまっていた家事を片付け始めた。

「…………お母…さん…………お母さん分かる？」

朦朧とする意識の中、誰かが和代を呼んでいる。

誰？

お父さん？

里子？それとも菜々子？

「……………ん」

頭の中ではしっかり返事をしたつもりだが、声がうまく出せない。なんだか頭がボンヤリしてとても眠たい。体を動かしたくても、体全体がとても重くて動かせない。

そのうち和代はまた深い眠りに飲み込まれていった。

目が覚めた和代はハッキリしない視界でボンヤリと周りを見た。

ここは何処だろう？病院のような……

自分はなんでここに寝てるの？

「あら武藤さん、目が覚めた」

看護師がキョロキョロしている和代を見て声を掛けた。

思っように声がでない和代は目を瞬きし看護師に合図した。

「先生を呼んでくるからね」と看護師は部屋を後にした。

廊下に行く看護師は途中照良にあい和代が目を覚ましたことを伝えた。

菜々子が和代のところへ行くと医師と照良が話しているところだった。

和代の話によると事故にあった直後から目が覚めたさっきまで記憶はないという。

叔母達が来て声を掛けて貰った事も夢だったのか現実だったのかわからなかったらしい。

半年後、最初の診断の通り、元通り普通に歩く事ができなくなった和代は杖をつき無事退院した。

退院後も一週間に一度はリハビリに通わなくてはならないということだった。

奈々子結婚

和代の退院から半年後、菜々子の結婚が決まった。

出会ってから5年の付き合いだったらしい。菜々子より2つ年上の
榊原晃さかき ぼよひという男性。

里子も何度が合ったことがある人でしつかりとしている印象を受けた。

しかし、気の強い年下の菜々子にしつかり尻に敷かれている様子だ。

その半年後、結婚式場。

里子が控え室へ行くといつもの勢いはどこへやら、菜々子は白無垢姿で緊張で強張った顔で座っていた。

「菜々子おめでとう。すごくきれいなね」

黒のロングドレスに淡いピンクのショールを肩に掛けた里子が言う
と、よそ行きのおめかしの服がとてもよく似合っている4歳になっ
たハルも目をキラキラさせ

「ななちゃんきれいな！」と菜々子を絶賛した。

菜々子はハルの言葉にニッコリした。ハルの隣では??こちらはよ
そ行きの服が窮屈そうなの2歳のリョウが??いつもと様子の違う菜
々子に戸惑った様子でキョトンとしている。

式が終わわり、義弟の晃に「お義姉さん」と言われ不覚にも里子は照
れてしまった。男兄弟のいない史郎は隣で嬉しいがっていた。

披露宴は滞りなく行われた。

袴姿の晃と色打ち掛けの菜々子。お色直しで晃は白いタキシード菜々子は淡いオレンジ色のカクテルドレスで登場。

ひとつひとつのテーブルを回りキャンドルサービスをし、ケーキ入刀の後は2人が向き合いお互いにケーキを食べさせた。

幸せそうな菜々子に里子と和代は胸が熱くなった。同じテーブルでは、食事に夢中のハルとリョウ、史郎と照良はほろ酔い気分になっていた。

菜々子の式から2ヶ月経った頃、里子は体調の変化に気づいた。そんな時菜々子から電話がかかってきた。

「あら菜々子。どう、新婚生活は？ちゃんと主婦もしてるの？」

「もちろんよ。あたしこっぴどく見えても家庭的なのよ」

「あら、知らなかったわ」

お互い「ふふふ」と笑いながら最近あった事を話した。

「それでねお姉ちゃん？？あたし赤ちゃんできたの」

菜々子の突然の報告に里子は喜んだ。

「おめでとう！体調は？仕事はどうするの？」

「うん、ちよつと悪阻が始まったみたいで気持ち悪いんだ。仕事はこれを気に辞めたんだ」

「そうなの……」

何か言おうとして里子は黙った。

「どうしたのお姉ちゃん？」「うん……もしかしたらあたしも出来たかもしれないんだ」

「本当？おめでとぅ。お姉ちゃんと一緒だと心強いな」

しかし、それから二週間後二人共残酷な運命を強いられる事となった。

あの電話の後から悪阻が酷くなり入院して頑張っていた菜々子だったのだが……。

「同じ時期に妊娠して同じ様にお空に返しちゃうなんて……いくら仲良し姉妹だからって神様は意地悪だね」

しばらくシヨックで落ち込んでいて連絡が途絶えていた菜々子だったが、少しずつ落ち着いた後にこんなメールが送られてきた。

初めての妊娠にあんなに喜んでいたのに……
本当に神様って意地悪……。

里子も大切な宝物を二度も空に返してしまい落ち込んだ。

しかしハルとリョウがいる。大切な子供たち。里子たちを守ってくれる史郎もいる。

里子はカラッと晴れた空を見上げた。

あたしのお空の赤ちゃん、菜々子のお空の赤ちゃん、仲良くしてる？遊び終わったらまたママのところに帰っておいで。
今度はこっちでママと遊ぼう。

ずっと待ってるからね。

二年後菜々子は長女を出産しその三ヶ月後里子も三人目となる男の子を無事出産した。

「かわいいね」

「そうね」

並んで寝ている二人をみて菜々子が微笑む。

「晃くんなんて桃香にメロメロでしょ？」

「そうなの、もう可愛い可愛いってすごいわよ。この間なんか『お嫁には出せないわね』って冗談で言ったらすごい剣幕で怒り出してね」

里子と菜々子は大笑いした。

「お姉ちゃんは今もうベテランね」

「そんなことないわよ。結構忘れてるものよ。蒼空を初めて抱っこしたとき『赤ちゃんってこんなに小さかったかしら』って思ったもの」

今では幼稚園に通うハルとリョウが庭で遊んでいる。

「あの子達もこんなに小さかったのよね」とにっこりした。

二人は毎日のように兄弟喧嘩をし毎日里子の怒る声が家中に響き渡り、毎日が騒がしい坂上家。

そして日々遅しくなっているハルとリョウ。

里子と菜々子が育児について楽しく話している静かな時間は突然終

わりを告げた。

「ママーお兄ちゃんかー」

「違うよ！リヨウが！！」

泣きながらリヨウが家に飛び込んできた。ハルも続けて入ってくる。

「もーなんで喧嘩ばかりなの？」

水遊びでびっしょりになったハルとリヨウ。里子はシャワーを浴びさせるため二人を風呂場に連れて行った。

小さな二人が寝ている部屋まで風呂場の大騒ぎが聞こえてくる。

そんな中でも桃香と蒼空はぐっすりと寝ている。

「お兄ちゃんたちスゴいね蒼空。お前は遅くなるんだろうね」
菜々子は寝ている蒼空を見つめて言った。

外は夏の日差しが照りつけ、雲一つない青い空が広がっている。

あたしの育児はこれからね。お姉ちゃんにもいろいろ教えてもらわないと。

明日はどんな発見があるのかしら。

明後日は？

そのうち桃香も蒼空も大きくなりあつという間に歩き出すんだろう。
楽しみだわ。

風呂場からの騒がしい声を聞きながら菜々子は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8813m/>

今日、明日、未来。

2010年10月9日05時45分発行